

海岸清掃を続けシロチドリやウミガメが産卵する豊かな砂浜取り戻す

農林水産大臣賞 鹿児島県 阿久根市立脇本小学校

遠浅の白い砂浜が約3kmにわたって続く脇本海水浴場。夏場は県内外から多くの観光客が訪れ、東シナ海に沈む夕陽スポットとしても知られている。その景観を守るために海岸清掃活動に取り組むのが同校の児童たちだ。砂浜にはペットボトルや空き缶などの漂着ごみが広範囲に散乱しており、長年にわたりごみ回収に励んでいる。

きめの細かい砂浜には多様な動植物が生息している。中でも、アカウミガメやシロチドリが毎年、産卵に訪れる浜辺としても有名で、児童はNPO法人脇本海岸ウミガメ・シロチドリ会の協力を得て、体験学習に取り組む。絶滅危惧種であるシロチドリは、全国的に急速に数が減少しており、脇本海水浴場でも、ヒナの巣立ちを確認できない年が増加。要因は複数考えられるが、砂浜の減少やヘビ、タヌキなどによる捕食などさまざま。砂に直接卵を産む習性があるシロチドリは、砂浜に草が伸びていたり、ごみが散乱していたりすると、産卵できない。無事に産卵したとしても、保護色の卵は人が気づかず踏んでしまうこともある。こうした現状を学んだ児童は、注意を促すポスターを作り、住民と海岸に設置している。

さらに、数年前からは、漂着ごみに混じるマイクロプラスチックにも目を向け、回収実験を実施。きっかけは、海洋ごみがウミガメに与える影響について学びを深めたことだった。脇本海水浴場では、アカウミガメの産卵の減少も深刻だ。児童は少しでも産卵しやすい環境を整えるために、夜間パトロールに参加したり、家族と海岸を清掃したりと自主的に活動を展開。

NPO法人脇本海岸ウミガメ・シロチドリ会の本脇喜博副理事長は、「シロチドリは今後いかに減らさないかが大事で、守りたいと思える人を増やさなければなりません。子どもたちが保護活動に取り組む姿は、地域に好影響をもたらしています」と手応えを語る。

校区には、イワシ漁が盛んな黒之浜漁港がある。児童は、地場産業のひとつである水産業についても専門家から学び、海岸清掃が多様な生き物の保護につながることを実体験している。

環境問題を自分ごとして捉えながら、未来への責任を胸に刻む。ウミガメやシロチドリが訪れる豊かな砂浜を取り戻すために—。



鹿児島県 阿久根市立脇本（わきもと）小学校

学校長：川原園 達司（かわはらぞの たつじ）

児童数：188名（2025年11月末現在）

住所：鹿児島県阿久根市脇本 8060番地

電話：0996-75-0004

アクセス：肥薩おれんじ鉄道「折口」駅から車で約5分

上：脇本海水浴場の清掃に取り組む児童と地域住民、2左：シロチドリを保護するためのケージを設置し注意深く見守る様子、2右：ウミガメを保護する児童手作りの看板、3左：マイクロプラスチックの回収実験を実施、3右：地場産業でもある水産業について専門家から深く学ぶ、下：校区にあるイワシ漁が盛んな黒之浜漁港